

無でありました故、さし當り帝大の建築科教室から借りて来て、間に合はせてゐたのでありました。尤も帝大の建築科でも参考書類は甚だ貧弱であつて、美校目下の建築科圖書室に比して遙かに劣つたものでありました。

『東京美術学校校友会誌』第十九号。昭和十五年十月

第三節 学科授業

フェノロサの「美学及び美術史」講義

「美学及び美術史」の科目は本校の創立者であるフェノロサと岡倉三が斯学の研究者であつたことなどにより、学科の中で特に重要な位置を占めていたらしく、開校当初のカリキュラムにおいては普通科第二年で週二時、専修科第一、第二年でもそれぞれ週三時と、多くの時間があてられていた。東京大学などの美学、美術史講座が発足するのはこれよりかなり後のことである。この科目の最初の担当者はフェノロサで、講義の通訳は岡倉がつとめた。講義の内容は、美学講義に関しては塩沢峰吉（大村西崖の旧名）の筆記ノートが参考になる。このノートは罫紙に毛筆で丁寧な清書されており、表紙には

「美学 明治廿三年第一学期筆記

美術学校御雇 エルネスト、エフ、フェノロサ講述

同校幹事 文学士 岡倉三三口譯

学生 塩沢峰吉筆記」

と記されている。筆記の時期は、当時は一学年が第一学期（九月～二月）、第二学期（二月～七月）に区分されていたから、明治二十三

年第一学期といえは同年一月から二月までの間を指すことになる。

このノートによれば、フェノロサは初めに世界には未だ一定したる美学は無いが発達の時機が到来しており、東西美術に通用する真の美学を成立させなければならないと説き、次いでギリシヤ以来の美術の概念の変遷を論じてから、ヨーロッパにおける美術の定義をめぐる諸説の紹介ないし批評を試みている。ここで彼が採り上げているのはウリアム・J・ステイルマン (William James Stillman, 1828~1901) 、オスカー・ワイルド (Oscar Wilde, 1866~1900) 、ホイスラー (James Abbot McNeill, Whistler, 1834~1903) 、アルフレッド・イースト (Alfred East, 1849~1913) 、イポリット・テーヌ (Hipolyte Adolphe Taine, 1828~93) 、ラスキン (John Ruskin, 1819~1900) の説である。最後にフェノロサ自身の説を述べ、まず、美術衰頹の最大の要因は①技術にのみ溺れること、②先人の模倣をこととする事、③機械的な自然模倣、実物模写に専念することであると、特にここで日本画のあり方に触れ、日本画家は優れた伝統から学んで流派的拘束から脱却すべきであるにも拘らず、西洋流派の陋習に捕われているは「暴を以て暴に代ふ」と非難されても止むを得ないと述べ、生徒に注意を促している。さらに、右の三要因即ち三病の治療薬として(㉑)獨創性 (Originality) 、(㉒)主題に対する真の愛情 (True Love of Subject) 、(㉓)芸術形式の真理 (Truth of Art form) を掲げ、(㉔)については古来の歴史に徴し、ダーウィンの進化論に依り、また、美術史に鑑みて自由と創意がいかに尊ばれねばならないかを説き、しかも、「新機軸なくば美術衰へ、新機軸のみにては失敗のみありて美術は成立たず。宗派の習なくて新機軸のみの熟せざるもの

は、美ならずして却て怪に近し。蕭白の如し。珍らしきのみにては美術とするに足らず。宗派を習ひ得た腕なくして新意のみにて美術界に入る者は磁石のなき水夫の如し。……日本人は日本の宗派を本として益々新意を出し、之れをして進歩せしむ可きなり。」と忠告している。(㉔)については「伎倆に慢心する時は画題を甚だ軽く思ふに至る。題を真によく愛し、己れの感情を現はす為めに己れを忘れて伎倆を施して始めて人を感動せしむるに足る。伎倆を主とすれば、絶へず己れを忘れず、題を愛する事なし。古来大家の往々世外に隱遁し、或は款を署せざる如き、利欲と自己とを忘れて其の題を表出する所のものを愛すればなり。宗教的美術が何れの国も高度に達したるは、作者より其の題を愛重したればなり。又よく題を愛すれば美術と社会の関係をよくし、時代の人の愛するものを作者も愛して作り、始めて人を感動せしむるを得る。故に題の真愛ありて始めて伎倆を応用す可きなり。何処の美術学校の教授法も其の欠点は、生徒をして真に題を愛せしむる能はざる事なり。」と述べ、バッハやシェークスピア、ダンテ、マサッチョ、ミケランジェロ、ミレールを例にとりて伎倆を示すことよりも先きに主題を真に愛して制作することがいかに大切かを説いている。ノートはここで終っており、残念ながら、(㉔)の説明およびこの後にまだ長く続いたであろう部分は全く不明である。

なお、この時期のフェノロサの美学に関連した著述として「美術哲学概論」(『国華』第三号。明治二十二年十二月)と「美術ニ非サルモノ」(同誌第五号。同二十三年二月)とがある。岡倉あたりが訳出したものと見える。前者の内容はフェノロサ自ら後者の冒頭で次のよう

に要約している。

前號余ハ既ニ美術哲學ノ目的ニ關シ聊カ講究説明シタル所ノモノハ第一此類ノ哲學ハ實際必要ナルコト第二其範圍廣濶ニシテ能ク古今東西ニ起リタル種々特體ノ美術ヲ悉皆抱括スルニ足ラサルコト第三其心理學上ヨリ能力ヲ研究シタル結果ニ由ラスシテ物體ヲ構成スルモノ、性質ヲ基礎トス可キコト、及ヒ第四世間在來ノ稱呼ヲ盲信セスシテ自己ノ區分ト類別トヲ明示ス可キコトニ在リ論ヲ結フニ當テ余ハ美術哲學ノ第一着ニ發議ス可キ名題ハ歸納的及ヒ演繹的ノ證據ヲシテ同一ナラシムルニアル旨ヲ促シヌ

こうして後者においては「歸納的推理」の前提となる、美術を美術たらしめているところの性質を把握するために、各種の美術（特に詩歌、音楽、絵画を対象に置く）に共通し、しかも美術に特有の性質とはどのようなものであつてはならないかを説いている。つまり、世上特に美術の普遍的性質と見誤られ易い八項目（一）実用的であること、（二）技倆の程度が高いこと、（三）快楽を与えること、（四）考古的および歴史的興味を惹くこと、（五）自然物模擬に精妙なること、（六）人の意志を道德的または宗教的正鵠に向かわしめること、（七）形と色と相混化して成ること、（八）作者が思想、智力、その他一般教育を備えていること）を掲げ、「誤謬除去ノ式」により、それらが諸美術に共通する性格ないしは美術に特有の性格ではないことを論じている。この二篇の著述もフェノロサの美学の全体像を把握しようとするとき参考になる。

フェノロサは「美学及び美術史」担当と当時の本校文書類に記されている以上、美術史も講じたことが考えられるが、資料は現存していない。なお、美学講義に対する生徒の反応はまちまちで、西崖のように割合よく聴き取っている（ノートには論旨不明としている部分もある）者はむしろ少数だったようである。溝口宗文などは次のように述べている。

フェノロサの講義は一通り筆記はしたのではあるけれども、わかるやうな年には達してゐないから、岡倉さんがそれをもぢつてみなにわかるやうに通訳して下さるけれども筆記してゐるだけで脳中たゞ空であつた。それに學科などどうでもようございませうといふ人があるから覚えはしない。

（『古美術』第十三卷第十二号。前出）

岡倉覚三の「美学及び美術史」講義

フェノロサ帰国後の明治二十三年八月、岡倉覚三は幹事を免ぜられて教諭（同年十月に教授と改称）となり、フェノロサの講義を引き継いだ。同月中に規則改正も行われ、その結果、美学・美術史科目も改正され、「美術史」を普通科第二年生に週二時、「美学及び美術史」を専修科第一年生に週二時課すことになった。後者の担当は岡倉であった。前者については担当者を明記した資料が残っていないが、『東京美術学校一覽』に両者が継続授業であることが記され